サラワックと石油利権の思ひ出

吉田秀太郎

実は8月12日付のジャパンタイムスのサラワックに関する記事中第三代目の Rajah であった Vyner Brooke の名が私の眼に入った途端に反射的に私の記憶―エピソード―が蘇ったかの如く浮び起こされた。それを纏めて「たつみ」に投稿しようかと考えていたところへ丁度「たつみ」第17号が私に届いた。早速拝見に及んだところ、なんと表紙の裏面に Vyner Brooke 夫妻、依岡省輔さん、近藤、後藤、清水の皆さんの元気な若かりし頃の大きな写真が載っているではありませんか。嬉しき驚きやら懐しさでいっぱい。それに勇気づけられ古き記憶をたどりつつエピソードを簡単に纏めて見ました。

それは今から48年程前のこと、日沙商会（社長依岡省輔、専務西川玉之助、支配人近藤正太郎）は古くよりサラワックに於てゴムのプランテーションを経営していた。お隣りのボルネオ、ブルネイ、両国は已に世界で有名な石油産出国であったのでサラワックに於ても石油開発の有望なるに着目し採掘採油の許可を獲得せんものとねらっていたのである。

毎年5月頃から Vyner Brooke 一家は夏季休養の為帰英することを例としていること、亦丁度、依岡省輔氏が神戸製鋼所専務として欧米視察旅行に発たれる機会を考え合わせて、その途次ロンドンに於て Vyner Brooke／依岡会談を行い石油開発の許可を直訴してみようという事になったのである。それでその事前準備的接触を計る目的を持って、当時鈴木商店員で若輩32才であった私が上司の密命を帯び、シンガポールより Vyner Brooke 及 Home Secretary の Norton 一行が乗船の "Majestic" 号（一万噸級、当時日本船では日本郵船欧洲航路の六千噸級が最大のものであった）に只一人の日本人乗客として単身乗り込み、印度洋、地中海を経てマルセーユ、パリ、ドーバーまで長き旅程を同行したのである。時は一九二六年（大正15年）4月、船中では毎日何かの催しもの、スポーツ競技、集まりなどあり、賑やかな楽しい船旅であった。ラジヤ始め一行の皆さんにも、親しくおつきあいも出来て万事好都合に運んだ。ドーバー海峡の連絡船上で当時元気であった、我が日本の若きプリンス秩父宮殿下がロンドン日本大使館の徳川書記官を従えスイスのスキーからの御帰途の一行に逢い、恐縮にも私に御挨拶を言上する機会を与えられ、且つ同船していた Vyner Brooke との御接見の御快諾まで賜ったのであったが残念ながら彼氏が折悪しく船酔いで気分が悪かったため折角の御紹介の好機を失ったようなこともあった。Vyner Brooke は サラワック国内ではラジヤ（国王）として勿論独裁的威力を遺憾なく奮っているが、足一歩国外へ踏み出すと只一介のシヴィリアンと何等変りなく至極気軽に行動している。イギリス内に於ても一市民としての待遇に過ぎない。

さて予定通りロンドンに於て Vyner Brooke／依岡省輔（日沙商会社長として）の数次に亘る会談を重ね、当時ロンドン駐在の海軍武官であった豊田海軍中佐（後に海軍大臣に就任）の協力をも得て執拗に石油開発の許可を懇願したのであるが、結局我が要望は遂に容れられず誠に遺憾な結末となったのである。惟ふに当時サラワックはイギリスの保護国であり、全面的に支配権を掌握している関係もあり、殊に石油資源については国際的な重要性を含む問題でもあるだけに、イギリス政府としても強く厳しき態度をとったものと推察に難くないところではあるが、遂に不成功に終った昔の一つの語り草に過ぎないものになってしまったことは返す返すも無念なことである。あの時許可が取れていたら鈴木商店はもとより日本国としても当時としては最大の快哉事であったと現在でも尚悔まれて仕方がないのである。

初代ラジヤとして登位した James Brooke は元々イギリスの海軍軍人であって印度に永年駐留勤務していた人、退役した年は今から約百三十年前の一八四〇年、伝え聞くところに依れば彼が退役の際イギリス海軍より払い下げを受けた一砲艦に乗り込み、南洋の海を遊弋中、偶々サラワック沖合の海岸で蛮族共が相争っているのを発見、大砲一発ぶっ放って上陸、争いを仲裁、平定、直ちにサラワック全土の Rajah に君臨した次第、大砲一発で王位を獲得した幸運な開拓者であったといえよう。昔にはこんな具合いに簡単に殆んど無償で領土を発見占有出来たらしく、他にもこれに似た大小の例が数々あったようである。サラワックは James（1840）→charles → Vyner（1939）で終り大体百年間の在位であったことになる。即ち第二次世界大戦が終った頃（一九三九年 ― 昭和14年）Vyner Brooke は已に八十歳に達していたので、彼は退位を決位しサラワック国をイギリス政府に全面的に移譲したのである。ブルック家としてはこれで総てが終ったわけである。彼は家族と共に直ちに帰英ロンドンに隠退し、余生を送っていた。しかし恐らくささやかな私生活に於てもラジヤ時代の独裁的華麗さはなかったとしても、それなりの楽しい雰囲気を充分エンヂョイしたことは容易に察せられるところである。

サラワックに於ては前記の通りラジヤとして三代共純イギリス人であったので謂所 White Rajah と言われ、珍しい存在であったことは事実である。尚 Vyner Brooke はイギリスのケンブリッヂ大学の卒業生で生粋のイギリス人、シルビア夫人はイギリス名門出身の才媛、サラワックに於ては Ranee（皇后）として Rajah と共に国民より愛敬を受けておられたのである。同夫人がおひとりでアメリカ経由で帰英の途次、日本に立ち寄られたことがあった。その時私は接待員に加わりあちこち御案内したのである。殆ど二月の酷寒の時候、而も底冷のきつい京都で御本人の特別の希望に依り、日本の旅館に一泊されたのであるが、当時として能ふ限りの暖房の手段を講じ手を尽したのであったが、矢張り余りの寒冷の厳しさに耐え切れず蒼皇としてホテルに引き揚げられ、我々もホッと一息いれたことであった。矢張り当時冬分は日本家屋のあの建て方では到底外人には宿泊は無理であったといえよう。シルビア夫人は仲々秀いでた文学的才能の持主であると承っている。お酒は洋酒がおこのみ、相当お強いようにお見受けした。

この機会に於て私は三人の White Rajah を含むブルック家御一統の誠に意義ある、興味深い、光輝のある過去の歴史に対し深甚なる敬意を表し、故人開拓者諸賢の冥福と併せてその後継者の将来の幸福に対し、謹んでお祈りを捧げることを御許し願いたい。

（昭和47年9月3日稿）

この稿を書き終って実は近藤正太郎さんに久しくお目にかかっていなかったので阿佐谷のお宅へ電話してみたところ、お孫さんに当る御方が出てこられて、正太郎おじは昨日（2日）朝とやらに亡くなりました。と聞かされ、余りのことにほんとうに愕然としました。御話しに依れば永い間のわづらいで老衰の末安らかな往生であったと承りました。私は茲に深甚なる哀悼の意を捧げ、謹んで合掌冥福を祈念申上げます。故人は凌霜（明治45年卒業）の先輩であり鈴木商店へ入社以来御教導を受けたのであります。近藤さんと同卒で同時鈴木商店に入社せられたお方は小川実三郎、瀬戸時友、荒木忠雄、寺崎栄一郎の皆さんがおられます。このなかで瀬戸、寺崎のお二人さんは今尚御健在でおられるようです。辰巳会の貴重なるメンバーがだんだんと失われていくことは一抹の哀愁がひしひしと身に迫るのを感じます。会員各位の御自愛と御健康を切に祈る次第であります。

尚一九七二年八月十二日のジャパンタイムスのサラワックに関する記事の全文左の通り、序でながらお目にかけておきます。

英人ボルネオ女王
BBCテレビにて再現す

レディ・シルビア・ブルーク夫人の一生は、ビクトリア王朝時代の一つのロマンスとして、キプリングの小説「殖民地の夢」でえがかれた。シルビヤは首狩族の国ボルネオのサラワークの女王(ラニー)で、一九七一年秋に死んだ。このたびBBCテレビに、彼女の生涯がその友人ハリウッドの名優のクローデット・コルバートによって上演され、そのなかに彼女の世を去る前の数ケ月間の交際中のエピソードが含まれているそうだ。

シルビヤ・ブレッドは、エッシェル卿の娘で、ビクトリヤ王朝の上流階級の社交界にデビューし、すべての貴族と知り合いだった。彼女は女王の前でダンスをしたし、小説家ジェーエム・バリーの友人の一人だった。バリーの劇曲「ピーター・パン」中のウエンディは彼女がモデルである。

そのころ、一人の娘が、女だけのオーケストラを作り、それに加入したいと母親にねだった。その女こそサラワークの女王マーガレットだった。シルビヤはオーケストラでは、太鼓をたたいた。かくてオーケストラのとりもつ縁で、ビニール・ブルークと交際し、ついに結婚した。ビニールの伯父ジェームス・ブルークは一八四〇年二本柱の帆船でボルネオに行き、サラワークの統治権を完全に握り、それを甥のチャールスに譲って世を去った。

シルビヤが、はじめてサラワークをみたのは、新婚旅行のすぐあとだった。それは全くおとぎ噺のようで、想像以上のものだった。

マレイ人は、種々雑多の色彩の衣服をまとい、小さなボートに乗り、ボートとボートはふれ合い、まるでなにびとかが、この世の花という花を河へぶちまけたようだった。全く豪華な眺めだった。ビニール・ブルークは、一九一七年父の死んだ年まで三年間、次の相続者としてラジヤー・ムーダの位置にあった。(ムーダはラジヤー継承者のことらしい)。ビニールは三代目のラジヤーとなり、シルビヤは、このとき三人の子供の母親だったが、ラニー(王妃)になった。この夫婦は白人の王、王妃として最後の人々だった。

即位式典のすんだのちは、土民統治、土民との会食、午後のシースタスー(マレイ族固有の行事らしい)等に日々を費す年々がつづいた。シルビヤの憶い出話しによると「毎日午後に土人は王宮に来ることを許され、ラジヤーは万事彼等の世話をした。わたしは土人の女どもと同席して、彼女らと雑談をかわし、家庭の世帯向き、喧嘩、子供の養育等の相談に乗った」。

ダイヤ族は首狩りを別段わるいことと思っていない。首狩りは一つの伝統だった。娘は首を取った経験のない男子とは結婚しない。彼等は一人の勇士であるしるしに耳に二つの牙を下げていた。

彼等は獲った首を煙でくすべ、わたしが彼等の家に行くと、わたしの椅子の上に首をならべてつるすのだった」。

ラジヤー夫婦は、第二世界大戦のおわるときまでサラワークを統治しビニール・ブルークは八十歳をこえたが、ついにサラワークの統治権を英国王に譲渡した。「このとき、これ以外に執るべき方法はなかったのだ。そうしなければ、独裁政治の時代はすぎて、おわったこの時、自分らは後退をせまられたのだろう」。

ラジヤーは、ロンドンに帰りて、隠退生活に入り、サラワークを独裁していたごとく、家事を独裁していた。

(飜訳　足立宇三郎・日沙商会)

English Ranee Recalled on BBC

Lady Sylvia Brooke's memories sounded like a Victorian Empire romance, a Kipling novel, a colonial's dream. For Sylvia was 'Queen of the Head-hunters', Ranee of Sarawak, and when she died in autumn 1971 an era ended. BBC-TV recently showed a program on her life, introduced by her friend, veteran Hollywood actress Claudette Colbert, and containing excerpts of an interview recorded a few months before her death.

Sylvia Brett was the debutane daughter of Lord Esher, and mixed with all the right people in upper-class Victorian Britain. She danced before Queen Victoria and was a friend of writer J. M. Barrie, who used her as a model for 'Wendy' in his play 'Peter Pan'.

Then a woman wrote to her mother, asking if she would like to join an all-girls' orchestra. That woman was Margaret, Ranee of Sarawak. Sylvia took up drums, and through the orchestra, met and married Vyner Brooke, whose great-uncle, James Brooke, had arrived in Borneo on a schooner in 1840, and became absolute ruler of Sarawak. He passed his throne on his nephew, Charles.

Sylvia was to get her first view of Sarawak shortly after her honeymoon. "It was unbelievable — just like a fairy-tale. It looked as though somebody had thrown a whole lot of flowers on the river — the boats were so close. Hundreds and thousands of Malays in different colors sitting in their little boats, it was a gorgeous sight."

For three years Vyner Brooke remained Rajah Muda, the next in line, until in 1917 his father died. Vyner became the third and last white rajah and Sylvia, by this time a mother of three, became ranee.

A coronation was held, then followed the years of colonial work, dinner parties, afternoon siestas and audiences granted to his subjects. Said Sylvia: "Every afternoon they were allowed to come in and the Rajah looked after the men and I had to sit with the women and talk about their little gossips and their home troubles and their quarrels and their babies and this and that."

"They didn't mean any harm about head-hunting. It was tradition. No girl would marry a man unless he had taken a head. They put two tusks through his ears to show he was a warrior. They smoked the heads and hung them up over my chair when I went there."

The couple ruled until the end of World War II when Vyner Brooke — nearly 80 years old — ceded his kingdom to the British crown. "It was the only thing he could do. Otherwise, I think, he would have been asked to leave because the days of autocratic rule were over. Finished."

The rajah retired to London, becoming a recluse and, in his last years, ruling his house as autocratically as he had ruled Sarawak.

THE JAPAN TIMES
August 12. 1972.

独乙入りしたある想出

鈴木丸衛

今は昔五十余年前鈴木商店倫敦出張所(未だ支店と呼ばれなかった頃)から高畑所長より、同僚の金子忠二君と共に漢堡事務所開設の命を受け大正八年(一九一九年)八月下旬和蘭経由独乙入りをした。当時口さがない人々から、今度、鈴木商店から「鈴木と金子」が来たそうだと、ヒヤかされたものでした。第一次世界大戦は、漸く前年十一月十一日に休戦となった許りで、当時未だ戦後の混乱が続いてる頃のこととて、目指す漢堡入りは、容易なものでなかった。勿論汽車のダイヤグラムなど、未だ確立して居らず、途中、ハノーバーで列車乗換えの際には、窓から乗込むという芸当を演じた有様であった。乗遅れたら最後、何日経ったら、又何時になったら次の列車が来るか、丸っきり見当のつかぬ有様であった。夜に入り漸くにして目的地、ハンブルグに到着、パラスト・ホテルというに辿りついて、ホットしたが、翌朝食堂に出て見ると、食糧管理制が布かれ居り、総て警察発行のチケットに依らねばならぬことが判り、急拠当局に出頭、パッス・ポートを提出、パン、牛乳等各種のチケット綴りを貰い受け、漸く食物にありついたような始末であった。

独乙が大戦で最後に手を挙げなければならぬキッカケとなったのは、武器弾薬よりも、実に食糧難の為めであった。全く腹がへっては戦いは出来ぬのである。主として北欧中立諸国から食糧を得るに必要な交換物資獲得のため、小はドアのハンドル、鍋釜等の家庭金具類から、遂には、銅像や寺院の鐘まで降して食糧と換えねばならなかった有様で、一時は空飛ぶ雀も食い物が不足のため墜死したと、噂された程であった。

独り食糧丈けでなく燃料等もその例外でなく、ハンブルグ市街の街路樹なども、一本おきに剪り取られてあるのを見かけました。

軈て内アルスタア湖の畔のビルに一室を借りうけ日本商社として一番乗りをしたが、間もなく大阪の長瀬商店、三井物産、横浜正金銀行、日本郵船と続々と進出して来たのである。(三菱商事は大分遅れてベルリンに店を出した)。前置は大分長くなったが、前記内アルスタア湖＝同湖は内(インナア)と外(アムスタア)の両湖に